

第40回夏季大学「新しい気象学」実施報告

教育と普及委員会

日本気象学会が主催する「夏季大学」は、今年(2006年)で第40回を迎えた。今回は「気象のシミュレーション」をテーマに取り上げ、8月5日(土)と6日(日)の2日間、東京の気象庁講堂で開講した。夏季大学はこれまで、小・中・高等学校の先生方や気象に興味のある一般の方々を対象として開催してきたが、今回は「気象のシミュレーション」という高度な話題をテーマとすることから、対象受講者を、「高校で物理を履修した大学初年次程度のレベルの方々」として開催した。

募集人員は50名程度としていたが、企画側の予想をはるかに上回る70名以上の参加が得られ、気象を学ぶ意欲のある方々の多さにあらためて驚かされた。

第40回のメインテーマとした「気象のシミュレーション」の技術は、コンピュータ演算能力の向上、大気のリモート観測技術やデータ同化技術の発展などを背景に飛躍的に発展し、現在の天気予報の基盤技術のひとつとなっている。このような現状を踏まえ、今回の夏季大学では、数値予報の黎明期から今日までの数値予報の発展の歴史、および最先端のシミュレーション技術の講義を通じて気象シミュレーションの意義や役割を明らかにし、さらに、簡単な計算実験によって数値シミュレーションの基礎を学んでいただくことを

大きな目的とした。講師名と演題を第1表に掲げる。

今回の夏季大学を運営するにあたっては、新たな試みも行った。これまで行ってきたテキストの作成・送付をやめ、講義のレジュメを掲示したWebサイトを用意した。このサイトにより、応募者各自で講義レジュメを入手するなど受講の準備を可能とした。また、講義終了後は、講師が使用した資料を可能な限り当該サイトに掲載し、必要に応じて受講者が入手できる仕組みを整えた。

全講義終了後に受講者から提出していただいたアンケートによれば、参加者のうち気象学会の会員は6割程度、気象予報士も約6割に上った。また、参加者の半数は初めての参加ということも判明し、夏季大学が気象学の普及という役割の一端を担っていることも示された。講義内容については、大まかな傾向として「講義内容は難しかったが興味深い」という結果が得られた。一般的な気象の知識はもちろんだが、その一方で、より高度で専門的な気象の知見や技術を求める声も少なからず寄せられており、これらを参考にしながら、気象学会としてさらに充実した夏季大学を企画していく必要性を感じた。

第1表 第40回夏季大学の講義題目と講師名。

日 時	演 題	講 師
2006年8月5日(土)		
10:00~11:30	気象シミュレーションの意義と役割	時岡達志 (地球フロンティア研究センター)
13:00~14:30	数値予報の歴史と現状、課題	増田善信 (元気象庁)
15:00~16:30	実際の数値予報：観測から予報まで	本田有機 (気象庁数値予報課)
2006年8月6日(日)		
10:00~11:30	地球シミュレータを用いた 顕著現象のシミュレーション研究	榎本 剛 (地球シミュレータセンター)
13:00~16:30	数値計算の基礎 —簡単なモデルを例にしたシミュレーションの手順	大関 誠 (気象研究所)